

日本教育大学協会がシンポジウム「今、教員養成に求められていることは何か」を開催

日本教育大学協会（会長＝國分充・東京学芸大学長）は2月20日（木）、日本教育大学協会企画・調査研究委員会エビデンスに基づく国立大学教員養成の将来像検討ワーキンググループ国立大学教員養成の将来像検討グループシンポジウム「今、教員養成に求められていることは何か～変化の激しい時代の教員養成の在り方を考える～」をWeb会議にて開催し、会員大学・学部の構成員をはじめ私立大学、教育委員会、報道関係者など約90名が参加した。

近年、社会の急激な変化に伴い、教員養成系大学・学部を取り巻く状況も変動し、令和4年12月には中央教育審議会において「『令和の日本型学校教育』を担う教師の養成・採用・研修の在り方について」という答申が出されている。そのような背景の中で、日本教育大学協会が組織する企画・調査研究委員会において「『令和の日本型学校教育』を担う教師の在り方と教員養成」というテーマのワーキンググループを令和4年度に設置し、今回、教員養成における私立大学の現状や、国立大学と私立大学の垣根を越えた連携協力等を考える場を設けることを目的として、本シンポジウムを開催した。

冒頭、國分会長の開会挨拶に続き、佐々木幸寿ワーキンググループ座長（東京学芸大学理事・副学長）から概要説明が行われた。続いて、森山賢一全国私立大学教職課程協会業務執行理事から「私立大学における教員養成の現状と課題」について、柘植良雄岐阜聖徳学園大学教育学部教授から「教員の質の担保と採用率の向上に向けて～現状と支援体制～」について、鳴海昌江北星学園大学文学部教授から「変化する若者と北海道の広域性に対応する教職課程のあり方ー学生の意欲喚起のための取組ー」について、それぞれ講演いただいた。

その後、佐々木座長を加えた4名で、パネルディスカッションを行った。

講演やパネルディスカッションでは、教員養成における私立大学の経営的観点からの意見や、国立大学と私立大学の連携協力の例などについての発言があった。また、教員養成の高度化についても積極的な意見交換が行われ、有意義なシンポジウムとなった。

（パネルディスカッションの様子）

